長命寺・・・

平成６年には西武線に「練馬高野台」という新駅ができ、順天堂大学病院も進出してすっかり景色が一変した感のある高野台周辺ですが、そこには、駅名の由来ともなった長命寺が南大門の威風を背にどっしりと構えています。

長命寺は、北条早雲の曾孫増島重明が慶長 18 年（1613 年）に開いたことに始まります。その後、寛永 17 年（1640 年）大和長谷寺の秀算を招いて開山しました。高野山を模したことから東高野山と号し、江戸庶民の厚い信仰を集め江戸名所図会にも取り上げられました。

広大な敷地の境内には、大師堂を中心に南大門、梵鐘、観音堂、御影堂などの諸堂を始め、数多くの石仏・石像群が立ち並び見るべきものの多さに圧倒されます。

ここでは、「身代わり閻魔」と「姿見の井戸」をご紹介しましょう。

御影堂裏には、承応３年(1654 年)に造立された「十王坐像」という、地獄を統べる 10 人の裁判官が肩を怒らせながら亡者の生前の罪業を裁判するように佇んでいます。閻魔ばかりが有名だけど他にも大勢いるんだぞと自己主張しているようです。そして、その奥に胸元がざっくりえぐれた「身代り閻魔」が鎮座しています。

これについては２つの説話が残されています。

その１つは、寺の再建時に大工が巨木の下敷きになったが、閻魔像のおかげでかすり傷１つ負わずに助かった話です。

もう１つは、住職が盗賊に襲われ、刀で切りつけられたが、黒い影が間に飛び込んできて刀を受け止めてくれて命拾いをしたという話です。

この話はやがて、あらゆる厄難を身代わりしてくれる「身代わり閻魔」として祈願されるようになっていったそうです。

また、御影堂前には古い小さな井戸があります。この井戸は本家高野山に伝えられる「薬井」を模したもので、眼病に利くとして、ここの水で目を洗うことが行われていたようです。とても深い井戸で、昼間でも星の影が見えるということから「星の井」とも呼ばれていました。

ところが、江戸時代に、「この井戸をのぞき見て自分の姿が水に映らなければ３年以内の命である」という言い伝えが人気？を集め、「姿見の井」の名前の方が広く流布しました。自分の姿が水面に投影されるのは至極当たり前のことですが、多くの参拝者がどきどきしながらこの井戸に自分の顔を映し「やれやれ」とほっとして喜んで帰っていく様子が思い浮かばれます。どこか定期健診の結果に一喜一憂する姿にも似ています。

最後に、御影堂扉に彫られた見事なレリーフに触れておきます。何かの仏教説話のようでもありますが、残念ながら謂れなど詳細は不明です。とりあえず今回は写真だけ紹介させていただき、後日分かりましたら再掲することとさせてください。

区内には除夜の鐘をつかせてくれる寺院として、近くは愛染院（春日町）などいくつかありますが、ここ長命寺もその１つです。練馬最古の梵鐘をつきながら、この１年の厄落としもよろしいのではないでしょうか。